

学校番号	18	学校名	静岡県立西部特別支援学校	校長名	鈴木 ゆかり
------	----	-----	--------------	-----	--------

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
(1)	ア 事後も含めた緊急時の対応力向上	・避難生活も含めた系統的な防災学習の実施 各学部1回以上	実施 100% 年度末評価	A	・各学部で防災食体験を含む防災学習に取り組んだ。食事場所や食事内容等の課題が出された。来年度も各学部で取り組んでいく。
		・発災後から学校再開までの動きと緊急時の動きを理解できたと答える職員 100%	AB 評価 98.2% 年度末評価	A	・今後も具体的な場面を想定した訓練や研修を行い、理解を深める。 ・今後も、実際に起きたときに生かすことができるように、保体課、医ケア課と連携して訓練等の内容を工夫していく。定期的な学級内におけるシミュレーション訓練も検討する。
		・必要物品の点検年1回（児童生徒個人防災用品は年2回）	実施 100% 年度末評価	A	・児童生徒の必要物品を保護者と確認することで防災意識が高まった。
	イ すべての児童生徒が体調を整え、気持ちよく生活できるための取り組みの充実	・円滑な医ケア体制により、医ケア対象児童生徒の授業が充実したと答える関係職員 90%以上	AB 評価 93.4% 年度末評価	A	・登校時の健康観察や物品確認を教員と看護師が連携して行うことができた。また、校外学習の打合せを行うことで医療的ケア対象児童生徒の安全安心な校外学習につなげることができた。来年度も継続する。
		・安全な生活・学習環境の中で授業を充実させることができたと答える職員 90%以上	AB 評価 94.5% 年度末評価	A	・来年度も食堂や教室が食事をする場として安心・安全な環境であるか、学校給食委員会等で検証を積み重ねる。特に教室等の食事衛生環境が徹底されるよう、周知の方法を検討する。 ・摂食研修は基本を知る、確認するといった点で有効と回答する職員が多かった。課題は日々の指導とのつながり、機能評価と実践のつながりであ

					<p>る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食事カードは、目標や支援、配慮事項の整理できること、担任外が担当するときに参考にできることといった点から有効に活用されることは増えてきた。課題は必要事項の確認である。 ・摂食カンファレンスは必要に応じて全学部で実施し、指導や支援の方針整理や共通理解の点で有効であった。課題は、組織としての体制と人材の育成である。 ・今後も安全な環境整備に努めるとともに、掲示物等を有効に活用していき学習環境を更に充実させていく。 ・運行安全マニュアルを基に乗降車の確認を徹底し、安全なスクールバスの運行をすることができた。来年度は、スクールバス内での生徒指導について介助員や担任と連携して充実させていきたい。
ウ 多様性を認め合い高い人権意識をもった児童生徒と教員	<p>・道徳教育全体計画に基づき、道徳教育の充実を図れた答える職員 100%</p>	<p>AB 評価 94.3% 年度末評価</p>	<p>A</p>	<p>・道徳教育全体計画から個々の目標を立てることができているが、教育活動全体の中でどのような授業づくりをすればよいか課題である。道徳教育推進委員会を中心に、道徳教育の授業づくりについて検討する必要がある。</p>	
	<p>・人権教育年間計画の作成</p>	<p>AB 評価 96.2% 年度末評価</p>	<p>A</p>	<p>・人権教育年間指導計画の作成に向け、全校統一で計画・実施した内容の整理をし、次年度の方針を検討した。今後は、各授業集団の取り組みを整理し、学年間・学部間のつながりを意識して年間指導計画を完成させていく。</p>	
	<p>・学校全体の人権意識が高まったと答える職員 100%</p>	<p>AB 評価 98.2% 年度末評価</p>	<p>A</p>	<p>・個人の自己評価からは、高い人権意識をもった教員が多いことが窺える。しかし、他の教員の発言について厳しい意見が出ていることから、人権意識を高めるための取組を工夫していきたい。</p>	

(2)	ア 「主体的・対話的で深い学び」をめざした授業づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・効果的にツールを活用し、PDCAサイクルによる授業ができたと答える職員90%以上 	AB 評価 91.5% 年度末評価	A	<ul style="list-style-type: none"> ・研修日や類型会を使って、授業について検討することができた。単元の評価をしたり、次単元に生かしたりすることが十分にできなかった。時間が十分に取れなかった。 ・まるっとシート（訪問）を使って、単元間のつながりを意識した授業を行うことができた。国語算数は他教科と関連づけて指導することができた。各教科への意識は高まった。子供の実態で各教科のつながりを考えることが難しかった。 ・実態把握シートは、新入生で作成後は卒業まで更新、随時見直しという形をとることで、共通理解という目的を果たしつつ、業務の効率化にもつながる。課題は、検討の機会の確保である。また、実態把握が自立活動の主課題の検討や指導の根拠説明につながるようにする。
		<ul style="list-style-type: none"> ・教科等横断的な視点に立った年間指導計画の作成と授業実践ができたと答える職員90%以上 	AB 評価 94.3% 年度末評価	A	<ul style="list-style-type: none"> ・年間指導計画の話し合い日を設定したことで、グループ内で個の目標の確認も合わせて行うことができた。来年度も継続する。また、年度当初の授業づくりが時間的にも人員的にも厳しいことから、年度末に次年度当初の計画を簡単に立てておくようにする。
	イ 教員の専門性向上	<ul style="list-style-type: none"> ・相談が日頃の悩みの解決に役立ったと答える若手教員90%以上 ・若手教員へ日常的に助言することができたと答える中堅教員90%以上 	AB 評価 88.8% 年度末評価	B	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの若手教員が、中堅教員との相談を日頃の悩みの解決に役立てることができた。一方、中堅教員は、自身の助言が不十分であると認識している傾向にあった。今後は、ペアを固定せず、OJL（職員間の対等な学び合い）体制に基づく職場風土づくりを行う。

		<ul style="list-style-type: none"> 各研修が業務遂行に役立ったと答える職員 90%以上 	<p>AB 評価 96.8% 年度末評価</p>	<p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> 外部講師研修を実施したグループ、教員は、多角的な視野で支援方法や目標設定の見直し、アセスメントなどを検討する機会となり有効であった。課題は、学部やグループなど組織的な取組ができるようにすること、学校生活や学習活動として生かしていくことである。 校内研修は有効であったという回答が多いが、対象者と内容の確認は検討する。
<p>ウ 将来の姿を見据え、個の力を最大限に生かすキャリア教育の実践</p>		<ul style="list-style-type: none"> 自立活動指導計画の改訂（流れ図の考え方を反映） 	<p>AB 評価 92.1% 年度末評価</p>	<p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> 中心的な課題の設定や課題のポイントを指導できたとの回答は多かった。流れ図のプロセスの意識をもっていること、課題を関連付けて指導内容の根拠説明ができることが必要であるとの意見もある。課題は、そのための研修や複数での検討等の体制を整えていくことである。 学習指導要領を基に目標を立てることができてきている。来年度以降、他教科についても行っていきたい。 I 類型の評価の仕方について学習会を行った。今後は、教科学習に携わる先生方に年度当初に必ず伝えることができるよう、類型長と連携していく。
		<ul style="list-style-type: none"> キャリア教育を意識し、個に応じた教育ができたと答える職員 100% 	<p>AB 評価 96.8% 年度末評価</p>	<p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> 進路に関する情報提供はできていたが、教育活動と関連付けた進路指導の内容については不十分な部分があった。今後はワンポイントレッスンの内容の精選や日常の指導の指針になるものを示していく。 新書式を活用し、面談時に確認するポイントをもとに、保護者と情報共有できた。今後、部分改定した R6 書式の周知や、保護者や教員間で共通理解できるツールとして更に活用できるよう、場の設定、活用の具体例等を情報提供していく。

		<ul style="list-style-type: none"> 各グループ・係で3事例以上の実践 	AB 評価 91.1% 年度末評価	A	<ul style="list-style-type: none"> 体育や自立活動の授業で、個に合った指導ができたという回答した教員の割合が9割以上だった。今後は、外部人材の活用を視野に入れて、スポーツ活動のさらなる充実を図る。 日々の部活動や大会の参加を通してスポーツに親しんだり、多読賞を表彰することで読書の推進に繋がったりした。読書週間の内容については学部により取り組みに差があったため検討が必要。
	エ ICTの活用	<ul style="list-style-type: none"> タブレット端末等の活用を工夫した実践各グループ2回以上 	88.2% 年度末評価	A	<ul style="list-style-type: none"> 小・中学部、訪問小中は、児童生徒に一人一台端末を割り振ることで個々に応じたアプリを入れたり、設定を保存したりして活用しやすいという声が多かった。高等部については、年度途中で端末の入れ替えなどがあり、アプリ導入がスムーズに行かないこともあり使いにくさが残った。
(3)	ア 各機関との円滑な連携と情報発信	<ul style="list-style-type: none"> 学校からの情報発信に概ね満足しているという保護者90%以上 	AB 評価 91.6% 年度末評価	A	<ul style="list-style-type: none"> 直接開催で学校公開を行い、本校の教育を理解していただく機会となった。今後、より参加者のニーズに合った公開ができるよう、参加対象を絞り、本校教育への理解を更に深めていく。 西特だよりは、地域回覧で好評を得ている。今後も、HP等を活用して学校の様子を適宜伝えていく。 ホームページに載せる各分掌からの新たな情報について、新しくタブを作ってレイアウトを整理した。 進路に関する情報をCOCOOで発信したが、アンケートで保護者からのニーズに応じた情報も提供し、進路情報として役立つことができたという声があった。

		・校外外の支援体制が整っていると答える職員90%以上	AB 評価 96.2% 年度末評価	A	<ul style="list-style-type: none"> ・教員によって感じ方の違いはあるが、本人や保護者の困り感をキャッチし、所属集団で共有できた教員が多かった。 ・電話相談や支援会議で関係機関と連携して課題に向かうことができた。ケース会、支援会議までの流れや支援体制を明確にし、課題に迅速に対応できるチーム力を強化する。 ・今後も事前打ち合わせで生徒の情報を丁寧に共有できるように進める。
イ 地域の特色や自然環境に目を向けた学習の充実		・各学部の取り組み100%	100% 年度末評価	A	<ul style="list-style-type: none"> ・地域ボランティア募集のチラシを地域各所へ掲示した。7人の登録者があり、絵本の読み聞かせ等を行っていただいた。また、近隣地域の畑や店に出向き、校外学習を行った。今後も地域との連携を深め、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの充実につなげる。
		・互いの理解が深まる交流ができたと答える職員90%以上	AB 評価 93.8% 年度末評価	A	<ul style="list-style-type: none"> ・感染状況に応じて日時の再調整を行い、目的達成に向けた直接交流を実施できた。引き続き、実態に合った目的を検討し、相手校との共通理解を丁寧に行いながら、交流活動を計画していく。
		・SDGsを意識した実践年2回以上	AB 評価 85.9% 年度末評価	A	<ul style="list-style-type: none"> ・SDGsに関する取り組みとして、児童会・生徒会役員が校内放送でエコキャブ運動の目的や結果を伝えたり、掲示物を作成したりした。SDGsを意識した授業を呼び掛けたり、取組例を示していきたい。
	ウ 地域に根付いた学校づくり	・地域と連携した取り組み年2回以上	100%実施 年度末評価	A	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の畑を見学したり、学校周辺の校外学習を実施したりした。来年度は60周年記念事業も有効活用し、さらに取組の様子を地域に発信していく。
(4)	ア 風とおしの良い職場づくり	・相談しやすい職場であると答える職員90%以上	AB 評価 76.9% 年度末評価	B	<ul style="list-style-type: none"> ・今後は、全ての職員にとって相談しやすい職場となるように、グループワーク等をとおして、心理的安全性の高い職場がもたらす効果やハラスメント防止についての共通理解を徹底する。

					<ul style="list-style-type: none"> 語り合う会については、職員間のつながりの強化において一定の効果が見られたが、会の目的をより明確にし、職員の主体的な取組にしていく必要がある。次年度は、「風通しのよい職場づくり」を目的に、職員が主体となって交流の機会を計画的に設定する。
イ 学校運営課題の解決に向けた組織的な取組み	<ul style="list-style-type: none"> プロジェクトによる課題の解決・進展 100% 	AB 評価 86.0% 年度末評価	B	<ul style="list-style-type: none"> ICT 活用の推進、自立活動指導計画の様式改訂案作成、教育課程の見直しに向けた課題の整理を行った。次年度は、各プロジェクトの目的をより明確化し、課題解決を図る。 	
	<ul style="list-style-type: none"> 共有した情報を学校運営に生かすことができたと答える職員 90%以上 	AB 評価 84.2% 年度末評価	B	<ul style="list-style-type: none"> 連携ミーティングでは、業務改善や学校課題に関する意見交換を行い、改善につなげた事例もあった。次年度は、学年主任も含めた拡大運営委員会の中で組織マネジメントに関する研修を行い、同僚性の高い職場づくりにつなげる。 	
ウ 指導の充実に向けた業務の整理・精選	<ul style="list-style-type: none"> 授業準備の時間が増えた答える教員 90%以上 	AB 評価 68.0% 年度末評価	B	<ul style="list-style-type: none"> 重要な協議がない月にはできるだけ会議を紙面開催にして授業準備時間の確保に努めた。 分掌内の引継ぎ資料がしっかり用意されているので、初めての業務でも取り組むことができた。会議内の時間配分、終了時刻の順守など、課題を感じる。 各係で課題を整理し、会議の内容を協議事項と紙面での連絡事項に分けることで会議時間を短縮することができた。 業務に偏りが大きく、特定の時期に負担感を感じている教員がいる。来年度を見据え、協力体制を工夫しているが、他分掌との連携・協力が必要である。 	
<ul style="list-style-type: none"> 周年行事に向けて 	<ul style="list-style-type: none"> 式典、記念誌、記念品等周年行事の具体の立案、提案等 	100% 年度末評価	A	<ul style="list-style-type: none"> 創立 60 周年記念事業を通して、感謝と夢を語る指導の実践をしていくという方向性を定めた。次年度は、60 周年実行委員会として学校全体で事業を進める。 	